

## 黒牛の絵画

安部孝作

そしてすべての照明が落とされる。誰もいなくなった部屋には一枚の絵画が残されている。端のない長い檜の木のテーブル、それを覆う純白のテーブルクロスは薄闇の中で生々しく、空気の揺らぎによっては白い芋虫がうねるようだった。そこに並べられた銀食器は老年の給仕によって細やかに磨かれ、煤の掃われた燭台には三本の翠色の蠟燭が刺さっている。今、中東風の顔立の壮年の給仕が一つ一つに火を灯して廻っている。鬼灯のように火が膨らむと、透明な蠟が融けて流れ出し、淡い褐色の光がテーブル状を照らす。瞬間に、これまで誰も座っていなかった高背椅子に、獨逸から招かれた来賓が立ち現れた。ネクタイピンや金釦、鎖骨に垂れる真珠のネックレスが端正しくある。暗くて表情までは見えませんが、辺りは話声一つ——息遣い一つ——聞こえず、胴体は不動を保ったままであった。等間隔に並べられた燭台の傍らには、蒼白い大きな花卉を広げたオペラ咲きのマーガレットが活けられ、ぬるい空気に仄かに香る甘みをとけこませ、いまだ来ぬ蜂や黄金虫を待つ寂しさに身を震わせている。この長大な部屋の空気をかき混ぜたため幾つもの扇風機が天上からぶら下がっている。その扇風機が全て同時に、また一巡した、その時この端のない直線的な大広間の中心点に設えられた古時計が、大鐘を揺らして来るべき時の音を響かせた。音は泡となり、扇風機の羽根の端に絡みつきなり弾けて消える。大理石が組み上げられた部屋の四方の壁に彫り込まれた、豹を模したような彫刻の舌先にぶら下げられた幾つものガス灯が一斉にともった。光度が徐々に上がるにつれて、時が再度流れ出したように宴が始まった。どの人もその淀みない所作で、その余りに完璧な動きに思わず人の皮膚を被った機械が動いているのではないかという印象を与える。そういった人々の中、ただひとり相変わずじつと浮かないまま、銀皿にのった合鴨のローストに釘づけになっている、垢抜けない少女がいた。極東の国日本の九州に炭田を幾つも所有するという豪商の娘であったキョウコは、この宴に来るのには前々からかなり躊躇していたのだが、頑固で横暴な父の、今にも筋張る拳骨を見るだけで、招待に応じることに首肯したのであった。彼は招待主の獨逸人の名前を読むこともできないほどであったため、ここに来る資格はないと思っていた。辺りでとびかう異国の言葉と哄笑、カチカチとなる食器やグラスの音が聞こえてきても、最早キョウコには街中の雑踏と同じようなものであった。しかしキョウコは空腹であった。せめて眼の前に出される食事だけは遣さずに平らげてしまおうと思った。だが、彼女の食欲も湧きあがったところで、正面に飾られた、金縁にはめられた黒い牛の絵画のせいで、たちどころに失せてしまう。その絵の黒牛の傍らに居るのは貧しい農夫で、その角に縄を結いて強引に連れて行こうとしているが、舌を突き出し、充血した白眼はぬめり、巨大な穴のような瞳を爛々とさせた黒牛はびくともしない。牛のわき腹にはアルファベットの「I」とアラビア数字の「21」焼き印がある。牛はこの農夫のものなのか、それとも今にこ

の農夫が盗もうとしているのだろうか。足元の草は枯れ、放埒に巻いた蔓が不気味な蓬色の植物、背景のくすんだ空色の雲、農夫の頭に乗った、燃れて黄色も褪せた檻樓檻樓のハUNCHング、それに抑えつけられただけのぼさぼさで脂つけの多い不潔な髪、剃られない鬚、太い指先の荒々しく溝の入った大きく分厚い爪、目元の皺に溜まった眼脂、踏ん張る足元に盛り上がった土が、赤黒い血を沁み込ませていること、それらすべてが物語るものが何か、キョウコは思いを巡らせたが、判然としなかったため、「どうして食堂にこんな絵を飾るのかしら」と不機嫌に思っただけだった。だがキョウコは気付かなかった、雲が覆い隠して暗くなった昼、眼鏡も持てない目の悪い農夫が力づくで引っ張っているその牛は、既に死んでいることに……。今までとまっていた分を取り返すかのように時を刻む時計は異様な速さで廻っていた。次第にその動きも緩やかになり、宴の雰囲気も発条が伸びきったようだった。顔の見えない人影も、扉の向こうも、隣の部屋も、天上の上も、床の下も、失せていく気がした。金の房がついた緋色のカーテンは重く閉ざされている。キョウコは外界から遮断されている感覚を覚えた。風、動物、鳥、何もいないのかな、そう思った時、突然精巧なガラス細工でできたシャンデリアが灯りをともしてこの大部屋を照らし出した。煌めくガラス、反射する銀食器の数々、照りかえす果物の皮、喜んだ表情を映し出す鏡、絹のテーブルクロスは銀雪のようで、目が痛むほどに眩しく、皮膚は焼け焦げそうだった。

第二の宴が始まったのだ。着飾った紳士淑女に、令嬢が再度談笑に華を咲かせ、蠟燭はもう控えめに、それでいて恥ずかしそうに震え、急激に融け切った。マーガレットは花弁を落としテーブルクロスを黄色い花粉で汚した。銀皿の料理も殆ど平らげられ、ワインも何本も空けられていた。顔を真っ赤にして唇の色を青黒くした男たちが濃緑のボトルとともに床に転がっている。紫煙が濃く充満し、燻された獨逸の令嬢の金髪は少し艶を失った。毛のない猿のような、卑猥な笑い声が次第にあがると、耳を押さえた少年少女は眠たげに喉を下ろし、眉毛をくすぐったく感じている。キョウコも少し疲れを感じていた。

そこへ漆黒のヴェールを被った一人の若い女が給仕に耳元で囁いた。俄かに照明は落とされ音楽が奏でられた。聞いたこともない東方のぼやけた音像。夜明けの海辺を思わせる。潮風はまだ弱々しい。寝覚めの火照った頬を涼しく撫でる。脛の裏には太母の微笑みを映す。水平線上では早起きの漁師たちが網を投げかけている。異国の旅人を乗せた巨大な客船が、厳かに波を切っている。雲が海に融けてゆく。砂浜は本物の星屑で埋まった。キョウコは星の尖った破片を拾って、髪を飾り、ヴェールを裂いて、アーモンド色をした美しい肌を曝して踊り始めた。給仕が銀皿にのせた色とりどりのマカロンを踊るキョウコの許へ運ぶ。空腹はないけれど、手が伸びる。甘くほんのりクリームが香るマカロン、歯触りが良く、口腔内で溶けてしまう生地は、指で少し強く押すと崩れて痕が付く。誘われるように、でも迷いなく、齧ってみた。不思議にも甘みはなくて、肉の味が微かにすると、あとは唾液の味がした。マカロンは、赤、萌黄、堇、桃、黄、孔雀石、と色取り取りで、その中の一つに、ラピスラズリのように、星を散りばめた群青色の天盤を模したものがあつた。それは明らかに忠実な鉱物を再現していたが、質感は柔らかな宇宙の球体にそっくり

だった。食べてみようか、止しておこうか。キョウコはその真理のように美しいマカロンを齧るのが惜しく思った。しかし迷っていると、羽団扇で深紅に塗った唇を隠した貴婦人が、近寄ってきて、欲望で濁った眼を細めてはいないか。キョウコはさっと手に取り、躊躇いなく一口齧った、が——その時、建物が大きく揺れ、カーテンの裏から拉げた枠が飛び出すと、ガラスの破片が銃弾のように飛び散った。灯りは消えて、どんよりとした暗闇が辺りを包む。来賓はみな狂乱し、椅子を蹴り倒し、テーブルをひっくり返した。木が押し折れる音や、板が踏み破られる音、銀皿が裂ける柔らかで鋭い音が混然一体の音の塊となった。あまりの騒がしさに耳は痛む。喧々諤々として退去し、やがて人の声は一切しなくなった。闇はすうつと薄くなり、まだ一つ灯る蠟燭の近くで、キョウコはまだ奇妙な踊りを続けていた。だが、音が一切しなくなると、彼女は壊れかけの椅子に座った。乱雑に散らばったあらゆる残骸に囲まれて眠ろうと瞼を閉じた。そして鼻と口を開いた。潮風を胸一杯に吸い込んだ。一面に広がる星屑の浜は燃え尽きて、灰の中から蟲が動き始めた。月と太陽は巡り巡って、何度も満月を迎え、何度も新月を迎えた。今は夜だろうか、昼だろうか、漸く眠気が強まって、植物が騒がしく唸り始めたころ、雨が降り始めた。キョウコは唇に着いた雨水を舌で舐めとった。とても甘い水滴を、乾ききった干物のような舌に何度も転がした。キョウコはもう目を開かなければならないかもしれないと思つて天を仰いだ。すると天は随分高く昇つていた。星が歩むたび金属音を響かせていた。まだ眠ろうとしてもいいのだろうか、少し安心した。とはいへ簡単に寝つけない。キョウコは苛立つて立ち上がろうとした。ところが身体は動かなかつた。蟻が脚の上を這っているのがわかるけれど、頭さえ動かない。翌朝、太陽が南中し、蟬がけたたましく喚き立て、牛がげっぷを三回した頃キョウコは眼を醒ました。そして目の前に一度会つたことのあるような異国の男が、青い目を虫めがねに拡大して見つめているのに気が付いた。聞き覚えある言葉を二三呟いて、大きなカメラを構えた。強烈なフラッシュが焚かれる。そしてリュックサックからスコップを取り出すと、キョウコの足を傷つける。痛い、痛い、と咽び泣いて、涙を流したら、細い種子がほろりと地面に落ちた。男は種を拾い上げて、虫めがねで丹念に観察すると、胸ポケットに入れた。鬚を撫で、喉を鳴らした。足許に、キョウコの赤い液体が広がり、黒く肥えた土は、どくとくと血管が脈打つように、吸い込む。土饅頭は膨らんでゆき、とうとう牛の形となった。男は牛の角に縄を結って、引っ張った。銅像か、あるいは地面から生えた岩石のように重くて動かない。踏ん張ると足許の地面は押し込まれたマカロンの生地のように凹んだ。綱引きは幾昼夜已むことなく、キョウコの身体は動くことを忘れ、綱引きもそのまま凍りついたかのように動かなくなった。そしてすべての照明が落とされる。誰もいなくなった部屋には一枚の絵画が残された。